

## 赤木文庫本『義経物語』常盤譚をめぐつて

谷 村 知 子

### 一 はじめに

源平の争乱の中で華々しく活躍した武将源義経の一代記ともいべき『義経記』は、その異本の数も少なく、本文の異同もあまり見られないとされてきたが、現在、その諸本論がすすめられていく中で、それぞれの諸本の特徴や諸本相互の関係が次第に明らかにされつつある。その一方、『義経記』が実際に人々にどのように受け入れられ、また受け継がれていったのかということは、未だはっきりしないのが現状である。

『義経記』という作品がある形を成していった後、どのように人々に受容されていったかということについての検討は、つまりは、その成立という点からの検討とはまた逆の方向からの、『義経記』というものの本質に迫ることになるのではないかと考える。そこで

その受容を考える手がかりとして『義経記』の変容の一例を考察してみたいと思う。特に他諸本との異同の目立つ赤木文庫本『義経物語』を中心に、中でも義経をめぐる人物、特に義経幼少期において重要な位置にあり、他作品との交流を考える上で示唆に富む義経の母常盤についての描写の変容を取り上げることにする。

平治の乱での夫源義朝敗北後の常盤をめぐる話は、『義経記』だけではなく、他の中世の文芸にも多く取り入れられ、さらに近世へと時代が進むにつれて拡がりを持つようになった。『義経記』諸本の間でも、常盤に関わる記述は変容が見られるが、この変容について赤木文庫本『義経物語』での記述を中心に、同じく常盤に関わる内容を持つ『平治物語』や幸若舞曲の一連の常盤物との比較・検討を行いながら、考察してみたいと思う。

## 二 赤木文庫本『義経物語』と幸若舞曲

『義経記』の諸本は高橋貞一氏・山岸徳平氏による分類・整理、さらには村上學氏・今西實氏によるそれぞれの比較・検討によつて相互の関係が明らかにされつつある。その諸本の系統として、流布本・判官物語・よしつね物語の三つに分かれ、そのうち最も古態を残しているとされる判官物語は、橋本・阿波国文庫本などの第一系列と田中本・岩瀬文庫本などの第二系列の二つにさらに分かれる。その第一系列からは流布本が生じ、第二系列からは赤木文庫本・竜門文庫本などのよしつね物語が生じた。<sup>②</sup>この判官物語の第一系列・第二系列の先後関係については、巻一―六および巻八については第二系列の方が、巻七については第一系列の方が、古態を残している<sup>③</sup>とされる。

この『義経記』のその数少ない伝本の中で、幸若舞曲との関連において注目されてきたのが赤木文庫本『義経物語』である。『義経記』と義経に関わる幸若舞曲との関係については、多く言及されてきたが、赤木本の独自本文について注目するとともに幸若舞曲との関連を指摘したのが佐藤陸氏である。佐藤氏は赤木本巻八を田中本・阿波本と比較し赤木本にのみ存する本文を幸若舞曲「高館」・「合状」の詞章を取り入れたものと述べ、また直接交渉としてでは

なくそれ以前に『義経記』巻七・巻八と幸若舞曲「富樫」・「笈搜」・「高館」・「合状」とが同じ原説話からでた兄弟作品であること<sup>④</sup>を推定されている。

この論を受けて、赤木本に注目しながら、『義経記』諸写本を系統立てて論じたのが村上學氏である。村上氏は「よしつね物語」（赤木文庫本・龍門文庫本）は、巻第一・二、巻第七・八を判官物語第二系列の本文を基にし、巻第一・二・八は幸若舞曲などに見られるプロットを補い多少の文章の改変を施して作成」されたものとし、また「巻第三・四・五・六は判官物語第一系列の本文展開上最も初期に属する本文を比較的忠実に継承した」と論じられている。そしてさらに、「かなり複雑な成立過程が想像される取り合わせ本であるが、逆に義経記の享受の様相を伺い知る上で貴重な存在」と位置付けられている。<sup>⑤</sup>このように両氏によって赤木本と幸若舞曲との交渉が検証されてきたが、それに基づいて巻一の常盤譚についてさらに考察を進めてみたい。

『義経記』巻一において、義朝の都落ちに続いて、その妻の一人である常盤の都落ちの話が述べられる。義朝敗北の後、常盤と義朝との間の三人の子は六波羅方の探索の目を逃れて一旦は大和の国宇陀の郡に隠れるが、常盤の母が捕らえられたことを知って、その命を助けるために常盤は三人の子を連れて六波羅に出頭する。そこで

常盤の美貌に心を動かされた敵の大將清盛に、三人の子の命と引き替えに自分に従うように強要される。最初は拒んでいた常盤ではあるが、子ども達のためには清盛に従い、それによつて命の助けられた三人の子はそれぞれに成人する。そのときの末の子が牛若、後の義経である。

この話は『義経記』諸本に見られ、誤脱による異同とみられる点はいくつかあるが、おおむね同じ記述となつてゐる。その中にあつて、まとまつた量の独自本文を持つのが赤木本の記述である。ここで巻一において赤木本が本文を基にしたと考えられる判官物語系第二系列の該当箇所と対照してみることにする。第二系列本文は田中本を引用した。<sup>7)</sup>

(赤木本)

清盛かの常盤を御覽じて、日ごろは火にも水にもなしたく思はれるが、いかなる心も失せはて、常盤に心を移されけり。この常盤と申は、天下一の美人なり。九条院と申は、事を好ませ給ひければ、洛中より、容顔美麗なる女を、千人召されて、その中より百人すぐり、百人の中より十人すぐり、十人の中より、一人選び出されたてまつり、いかに見れども飽かず、顔に化粧をせざれども、芙蓉の背、丹花の唇、柳髪風にたをやかに、いつも変らぬ姿にて、見る人これに飽く事なし。しかればその時よりはじめ

て、常盤とは名づけ給ひ、院の御気色めてたかりしかども、かの義朝、御感に預かる子細あつて、院より常盤を賜はつて、比翼の契り浅からず。しかれば清盛の心を、懸けさせ給ふもことほりなり。「我にだにも随ひぬるものならば、末代は子孫のため、いかなる敵にも成らばなれ、三人の子共を、助けばや」とぞ思はれる。頼方景清に仰せつけ、七条朱雀なる所にぞ置かれける。日番当番をも、頼方が計らひにして、守護しける。清盛つねに常盤かもとへ、文を遣はされけれども、取りてだにも見ず。清盛はあくがれて、ある時は怒りての給ふ。又ある時は様々にかきくどき、ことばの数をぞ尽くされける。しかれば母も様々に、常盤を諫めけるほどに、遂に随ひたてまつる。さてこそ起請文に違へず、常盤が子どもは、所々にて、成人せさせたてまつる。

(田中本)

清盛、常盤を見給ひて、日ごろは火にも水にもなしたく思はれるが、怒れる心もやはらぎ給ひけり。常盤と申すは、日本一の美人なり。九条院はことを好ませ給ひければ、洛中より、容顔美麗なる女を千人召されて、その中より百人、百人の中より十人、十人の中より一人選られたりける美女なり。清盛、われにだに従はば、末代は子孫の為にはいかなる敵にもならばなれ、三人の子どもをば助けばやと思はれける。頼方・景清に仰せつけて、七条

朱雀なるところにぞ置かれける。非番・当番をも、頼方がはからひにしてぞ守護しける。清盛つねに常盤がもとに文を遣はされけれども、取りてだにも見ず。されども子どもを助けんが為に、終に從ひけり。さてこそ常盤が子どもをばところどころにてこそ成人せさせけれ。

この二本の相違を具体的に見てみると、

(a) 田中本では、清盛の常盤を見る場面で「怒れる心もやはらぎ給ひけり」とするが、赤木本では「いかなる心も失せはて、常盤に心を移されけり」とする。

(b) 千人の美女の中から選ばれた常盤についての説明で、赤木本では常盤の名前の由来と義朝とのなれそめの説明も記述する。

(c) なかなか従わない常盤について、赤木本では怒ったりかきくどいたりする清盛、常盤を説得する常盤の母、起請文の存在を記述する。

の三点が挙げられる。

この独自本文については、村上學氏により幸若舞曲「伏見常盤・「靡常盤」などにみられるような記事を受けて増補されたものと推定されている。<sup>⑤</sup>すなわち、(b)の常盤の名の由来については「伏見常盤」の、

とつこのまへと申は。只いつもの姿にて。更にけしやうはなけれ

共、世に勝れたる女なれば。さらは常葉と付よとて。とつこのまへを引替て、常葉の前とそ召れける。<sup>⑥</sup>

という、平常の素顔の美しさを常緑樹によそえて名付けたとするような表現を受けていると見られるが、「伏見常盤」ではその名の由来が端的に把握できるのに対して、赤木本の場合はその美貌の表現が膨張したために名の由来が茫漠となつてしまつている。また、義朝とのなれそめについても「伏見常盤」の、

有時義朝。紫震殿のしもくちにて変化の物をきりとむる。御門御感におほしめし。官も司も何ならず。本より望みの事なれば。さらは常葉をとらせんとて。忝も帝は。常葉のまへの袂に御手をかけさせ給ひ。二三きたはしたんつの石。雨落のきはにて給りけり。

というような記事を前提にして増補した結果、ストーリーの流れを乱してまでもこの場所で義朝と常盤のなれそめを述べて、清盛が常盤の美貌ゆえに心奪われたのではなく、義朝の愛する妻であつたがゆえに欲したとなつていて、文脈の乱れを生じてしまつている。そして、(c)については、「靡常盤」後半に見られるような、常盤をなんとかして自分に従わせようとする清盛とそれをとりなす役割をする常盤の母についての記述を前提にしたものと考えられ、特に赤木本での「起請文に違へず」の句はそれ以前に該当する記述がなく、増補の結果の照応の乱れが起こつている。しかも、同様の記事を載

せる金刀比羅本『平治物語』においては「起請文」についての記述はなく、それゆえに「靡常盤」との関連が考えられる。以上のよう  
に、村上氏によって赤木本卷一の常盤譚と幸若舞曲「伏見常盤」・  
「靡常盤」との交渉が指摘されている。

しかし室木弥太郎氏の、「靡常盤」が平瀬露香田藏本一本しか現存せずまたその上演記録も見られないことから「靡常盤」があまり演じられなかった可能性の指摘と本来の舞曲ではない語り物ではなかったかという推測を受けて、村上氏も赤木本に増補された記事が幸若舞曲として世上に広く知られていたとするわけにはいかないとしながらも、赤木本の増補が「前提としたような、断片的、或はメロ的などり入れ、プロット自体を知らぬ者には殆んど疑問さえ起こさせないような素気ないとり入れ、云いかえれば、幸若舞曲に記されているようなプロットを参照することによってはじめて赤木文庫本の増補詞章の内容が説き明かされるようなどり入れが成されていることを注意」すべきと述べている。そこで赤木本卷一の常盤譚での独自本文をさらに検討してみたい。

(a)の赤木本での「いかなる心も失せては、常盤に心を移されけり」という記述における清盛が常盤に「心を移す」という表現は、「靡常盤」には見られず、たとえば金刀比羅本『平治物語』で六波羅へ出頭した常盤を見た清盛についての「大宰大式清盛は、常盤が

姿をみ給ふより、よしなき心をぞうつされける。」という記述や、『平家物語』卷一「祇王」においての「入道相国舞にめで給ひて、仏に心を移されけり。」という清盛の美しい女性に惚れやすいという性格についての記述と重なるものである。また、(b)で繰り返される「いかに見れども飽かず・見る人これに飽く事なし」という記述は、「靡常盤」にも述べられる、「中にもみさめ（見醒）なきとて、ときはとかれをなつたり。」という常盤の名の由来についての説明や、学習院本『平治物語』での「見れどもく、めづらかなるかほばせなり。」という記述にみられる見飽きることのない常盤の美しさの形容との関連も考えられる。さらに、赤木本では常盤と名付けられた後、「院の御気色めてたかりしかども」とあるが、これも「靡常盤」の「常は院の御心かよはしおほしめさるれ」という院との関係に言及する記述に類似する。これらのように赤木本の増補部分は、様々な常盤に関わる記述との関連性を持ったものである。

これについて、同じように常盤に関わる物語を持つ『平治物語』の側からも、また常盤物について連作性を指摘される幸若舞曲の側からも、その背後に長篇の「常盤物語」というようなものの存在とその広汎な流布の可能性とが考察されているが、赤木本での増補においても、常盤についての説話の拡がりの影響を受けながら、赤木本独自の常盤譚が再構成されていたのではないだろうか。

また、「起請文」についてのような断片的な取り入れは、巻八での増補が幸若舞曲「高館」・「含状」の記事を前提としたような記述になっているとして佐藤陸氏や村上學氏によって指摘されるように、同じく「靡常盤」の記事を前提としなければ理解できないものである。すなわち、赤木本の増補の特徴として、幸若舞曲などに見られるような内容を前提としながらも要約的な増補であるため、ある程度の共通認識の存在を必要とした増補であるという点が挙げられる。赤木本の増補の側とそれを享受する側とで「起請文」についての共通認識があったと思われる。

この前提とした記述の傾向は、赤木本の「清盛かの常盤を御覧じて」や「かの義朝、御感に預かる子細あつて」などの「かの常盤」・「かの義朝」という表現にもみることができ、これらは幸若舞曲「伏見常盤」での「かのとつこのまいと申せしは」や「靡常盤」での「彼ときわと申は」・「されは彼義朝は」と同類の表現で、それらの影響を受けての表現であるとも考えられるが、「かの」を付して既に相手に了解済みの事柄あるいは共通の事柄を指示することによって、前提として存在するその対象のイメージをふくらませながら連想させているのである。<sup>⑮</sup>「かの常盤」とすることで、その直前で述べられる、母の命を助けるために三人の我が子を連れて泣く泣く六波羅へ出頭してきた哀れな女性というだけではなく、たと

えば、幸若舞曲や『平治物語』などで述べられるような苦難の道行きの後の平安も束の間に身を切られるような決断を迫られて京へ戻ってきた敗将の妻で、しかも清盛が心を奪われてしまうのも当然というべき美貌の女性といったようなことを連想させるのである。

「かの義朝」についても、常盤譚の前に述べられる義朝都落ちの記事での簡単な説明を指すだけでなく、源氏の頭領として平治の乱で戦いそして敗れ、東国へ落ちのびる途中で無残な死を遂げる常盤の夫義朝を連想させ、その義朝がどのようないきさつで常盤と「比翼の契り」を結ぶことになるのかを赤木本では記述するのである。しかもここでは義朝が「御感に預かる子細」の詳細は述べられず、『平家物語』での頼政説話に類似した義朝の変化の物を退治する話をおそらく前提としたものであろう。

赤木本巻一の常盤譚における断片的・省略的な増補は、その内容の共通理解を前提としたものと考えられる。それは、常盤についての話の流布の状況にも関わりながら、提供する側と享受する側において共通の認識が存在するところでの赤木本の独自性といえるだろう。

### 三 赤木本巻一常盤譚の変容の背景

赤木本巻一の常盤都落ちの記事において、増補・改変が行なわれ

ていることを考察したが、これらの変容の意図・背景をさらに検討してみたい。

その変容の第一として常盤自身の描写に変容が大きく見られる。

先にb)とした常盤の名前の由来と義朝とのなれそめについての増補の部分で、常盤の美しさがより具体的に強調されて表現されていることがまず挙げられる。他本では、常盤が千人の中から選ばれた美女とだけ説明するのに対して、赤木本では常盤が化粧をしなくても美しく、それはいつも変わらぬ姿で飽きることがないゆえに選ばれたとその名の由来に寄せて述べられる。また、幸若舞曲では、美女比べで最後に残った三人のうちの飾り立てた二人に対して、化粧はなくとも見醒めることのない美しさゆえ、常盤と名付けられたとするが、赤木本ではさらに常盤の美貌を「芙蓉の背、丹花の唇、柳髪風にたおやかに」というような美しさについての定型的な常套句を用いて記述する。前節で考察したように、赤木本では常盤の美貌を強調して述べようとして、このような増補を試みたと思われる。この常套句を用いての常盤の美貌の説明と対になるように、義朝との関係も「比翼の契り」と述べられる。前節で考察したところの「かの」で連想される武家の頭領義朝と美女常盤の仲睦まじい様子が、定型的な表現にひっぱられながらひとつの世界を作っているのである。

また、「院」との関係をさらに緊密に述べることで、常盤の出自についても高貴な女性としての方向へ移行していく。先に「九条の雑仕」としていた常盤の出自を高貴なものとする傾向については、抑常盤御前の先祖を委く尋るに、父は梅津の源左衛門、母はかつらの宰相とて、院に宮つき奉る（「伏見常盤」）

というように幸若舞曲においてもみることができる。「伏見常盤」では、美しく教養があり武家の出身でしかも貴族的な理想の女性としての常盤像が形成されており、また「靡常盤」では、清盛になすすべもなく従うのではなく、子供たちを守り通すため清盛から起請文をもぎ取る強い母親の面もみせている。このような常盤像の理想化の傾向を受けて、赤木本においても、美女常盤と武人義朝との劇的な出会いが、室町時代小説的な言辞に彩られながら述べられているのである。

赤木本における理想化・高貴化の傾向は、常盤自身にとどまらず常盤の三人の子たちにもみることができる。たとえば他本では「子ども」（田中本）とするところを赤木本では「三人の若君」としたり、「今若」・「乙若」（田中本）に対して「今若殿」・「乙若殿」・「牛若殿」というように、常盤の三人の子たちに敬称を用いているのである。これもまた、源家の御曹司たちとしての理想化といえるだろう。

またさらに、常盤の母についても比重が置かれるようになっていく。他本では、常盤の行方を問いただすために楊梅町に住む常盤の母の関屋が六波羅へ呼び出され、それを伝え聞いた常盤が都へ戻ってくるというところで、常盤の母の出番は終了するが、赤木本では前節で(○)としたところにおいて、清盛に従わない常盤を説得する役割を担っているのである。

『平治物語』や幸若舞曲においても、常盤の母は常盤を説得している。『平治物語』では、老いた母の身を案じて六波羅へ出頭してきた常盤を見て嘆き悲しむものの、清盛からの文を受け取らない常盤に対して、「少あひもの・尼が命をたすけんとおもはゞ、おほせにしたがふべし」（金刀比羅本）と意見して、子どもたちと自分のために清盛に従うように説得する気弱な母である。それに対して、

幸若舞曲「伏見常盤」では先に述べたように、その母を「かつらの宰相とて院に宮つき奉る」とし、また「靡常盤」では「九条の院におはします母のにこう」とするようになり、常盤の母の身分も高貴なものとして述べられる。さらに「靡常盤」では六波羅方の拷問にも屈せず、逆に清盛をやりこめてしまうほどの教養をもった気丈な母である。赤木本においてもその母は、なかなか清盛に靡かない常盤を三人の子たちのためと説得し、それでもはつきりしない常盤に代わって手際よく事を進め、清盛たちに屈することなく常盤を支えて自

分たちの有利な方向へことを運んでいく、したたかな強さを持った女性である。おそらく、清盛から起請文をもち取る常盤自身の母としての強さと合わせて、常盤の母の理想化された姿<sup>②</sup>が赤木本に投影されていると思われる。

そして(○)の部分でクローズアップされるのは、清盛の常盤を得ようとしてじたばたする姿である。美女常盤との関わりにおいて理性を失ってしまう清盛の姿は、平家の頭領たる武人清盛としての面影を全く失ってしまったている。英雄色を好むというよりは、なんとも卑俗化されてしまっている。赤木本においてはおそらく「靡常盤」で見られるような清盛像を受けての増補と見られるが、幸若舞曲の世界だけでなく時代が下るに従って付加されていった清盛のイメージの影響をも受けているのであろう。

さてこの常盤像の変容を考察するにあたって、同じく幸若舞曲で取り上げられる静と義経北の方の記述と比較してみることとする。

『義経記』で義経の思い人、都一の白拍子静が活躍するのが土佐坊正尊夜討ちの場面である。夜討ちを迎え撃つ義経を気丈にも助ける静は「賢々しき者」として描かれる。このような静の性格は幸若舞曲「堀川夜討」の中ではその面がさらに強調されており、静にも戦闘に参加させている。また、彼女は都が日照りの時にその舞のよって雨をもたらしたとして有名であったことが繰り返し語られ、そ



の「容貌は王城に聞」こえ、「能は天下第一」の美女であった。その静がいよいよ鎌倉に召喚されると、いてもたってもいられない母の磯禪師は鎌倉まで下り頼朝と対面、その胸の内をぶつける。幸若舞曲「静」ではこの母が、義経の子を身ごもっていた静の胎内探りをされそうになったところを頼朝北の方政子の奉書によってすんでのところを救い出す働きをする。静は堀藤次に預けられ子を産むがその子は男子であったため殺されてしまい、悲しみのうちに若宮八幡で舞うことになる。ここでの静は、義経との逃避行と別れ、さらにはその子までも奪われるという苦難を経験し、やつれ果てたといえ「静を見るに我朝に、女ありとも知られたりけり」と言われるほどの凄艶な美しさである。そして静は頼朝の面前で義経への思慕を堂々と歌いあげるのである。<sup>23</sup>

義経北の方は久我大将の姫君で、幼くして両親を亡くして後は乳人十郎権守兼房を頼るばかりである。いざ義経奥州落ちにあたってついでいこうと「清水を流したるごとくの御髪、長の余りたるも」ぶつつりと切って稚児の姿に変装し、その姿は「王昭君」にもたとえられる。苦難の道行きの果てに奥州にたどりつくことができるが秀衡死去によってその子息泰衡に攻められ、とうとう義経主従とともに衣川にて自害して果てることになる。その介錯は六十余りの老体にもかかわらず都から北の方の御供をしてきた兼房である。手塩

にかけて育てた姫に刀を突き立てるのに躊躇する兼房を、北の方は氣丈にも「疾く〜」と叱咤する。その言葉にうながされ兼房は北の方に刀を向ける。幸若舞曲「含状」でも、意を決して刀を抜いた兼房ではあるが、北の方の、

くれなゐのかほばせは、露をふくめるかいだうの花かともうたがはれ、月もねたむべかりつる桂のまゆの、ほの〜とおもひみたれし黒髪②の、そのひまよりあらはれて、ゆきのやうなる御はだ②という姿を見て刀を立てることができない。その兼房に北の方は、「おくれたり兼房よ。はやとく〜」と介錯をうながし、そして兼房は「よはき心をひきたて、」北の方を刺す。

このように、義経をめぐる二人の女性像は共通性を持って『義経記』にも幸若舞曲にも述べられ、両者の間に接点を見ることができ。このような両者の関係については、『義経記』巻七・巻八と幸若舞曲について、同じ原説話から出た兄弟作品のような位置関係が既に論じられているが、同様のことが静・北の方の記述においても考えられるだろう。<sup>24</sup>

しかもこの二人の女性性は類似した人物像で描かれる。静も北の方も、義経との深い契りを結ぶことで運命に翻弄され苦難の道を歩むことになる。二人ともその美しさは比類なく、しかもけなげで気丈な強い一面を持つ女性として描かれる。そして彼女たちには磯禪

師・兼房といったその苦難を共に経験し、ときには導く役割をはたす保護者的な人物がそばにいる。これは常盤譚において、赤木本で増補・改変することによって常盤が獲得した像と重なるものである。常盤もまたその美貌の誉れ高く源氏の頭領義朝と比翼の契りを結ぶものの、一転して敗将の妻としてその子たちの命を守るべく、母の意見を受けるとともに自らも起請文を要求した上で敵將に従うのである。他本では義経登場の前段階の記述でしかなかった存在の常盤が、赤木本では義経をめぐる一人の女性として性格を持ち、しかもそれが静・北の方といった他の義経と関わりを持った女性と類似して描かれるところに赤木本の変容の一つの意図が存在すると思われる。他本では注目度の低かった常盤の話が、幸若舞曲のような他の形で拡がるのを受けて常盤像の増幅が試みられたのではないだろうか。

幸若舞曲は軍記物語に関わる勇壮な軍語が多く、武士層にも好まれていた。たとえば『徳川実紀』天正九年（一五八一）三月二十一日条において落城の際に「高館」を舞ったことが記されるなど、義経に関わるものが多く演じられていた。また常盤に関しては、山科言継の日記『言継卿記』天文二十三年（一五五四）正月五日条に「鞍馬常盤」、同じく天正四年（一五七六）三月六日条に「伏見常盤」の上演記録を見ることができる。また武家の方では徳川家康の

家臣徳川家忠による『家忠日記』天正十五年（一五八七）五月九日条および文禄二年（一五九三）閏九月十五日条などに「伏見常盤」の上演記録がみられる。<sup>②③</sup>

幸若舞曲において、常盤に限らず強く美しい女性が多く登場するのは、一つは女性の演じ手が多かったためということもあったが、このような強く美しい女性の姿を支持する風潮がその基盤にあったということも指摘されている。<sup>②④</sup>家のために身を挺して働き、困難にも屈せず、したたかにかつ積極的に人生を切り開いていく女性の姿は、時代の流れのなかで武士の母・妻・娘としての理想像だったのではないだろうか。常盤もまた「源氏の大将義朝の妻」であり「源平合戦の英雄義経の母」であった。敗将の妻として後の義経を含む遺児たちを守った、つまりは源氏再興の一人を母の強さを以て守った常盤は格好の興味の対象であったと思われる。

『義経記』におけるこの常盤譚は、また別の変容も見せている。版本の系列とされる芳野本ではさらに常盤の母が前面に出る。六波羅へ搦め捕られた常盤の母がその糾問に対して、

われ六十にあまる身のいのち、あすをもしらぬおひの身をおしみて、いまたゆくすゑながき孫どものいのちをはいかでうしなひ侍べきなれば、しりたりとも申まじ、ましてしらぬゆくゑなにとか申侍ん<sup>②⑤</sup>

と答えるのである。そして常盤の記述についても変容がみられる。その美しさについて、

まことにかんのりふじんやうきひも是にはすぎじとおほへける  
と描写し、そして度重なる清盛からの文に、

貞女両夫にまみへずといふことはにもはづれ、又世の人のそしり  
をおもはれけれども、た、三人の子ともをたすけんために、な  
れぬふすまの下ににるまくらをならへ給ひけり

と清盛に従う常盤の心情を述べる。常盤の母の返答については古活  
字本『平治物語』との関連が指摘されており、赤木本や他本に比べ  
て気丈な母の姿が述べられる。また常盤の美しさの表現についても  
同じく古活字本『平治物語』の記述に類似をみることができる。清  
盛に従う常盤の心情は、貞女としての行いからははずれてしまうこ  
とを無念に思いながらも子どもたちのために清盛に従うとするもの  
である。ここでの常盤の煩悶は、赤木本ではみられなかったもので  
あり、常盤の母の気丈な姿と合わせて、また別の女性観に基づく常  
盤譚の変容と言えるであろう。

## 注

- ① 高橋貞一氏「田中本義経記の研究」(高橋貞一氏編『田中本本義経記  
と研究(下)』、未刊国文資料刊行会、昭和四十年)。

赤木文庫本『義経物語』常盤譚をめぐって

「山岸徳平氏「橋本判官物語語解題」(『判官物語』、古典研究会、昭和四  
十一年)。

村上學氏「義経記諸本の位置づけ」(角川源義氏・村上學氏編『赤木  
文庫本義経物語』、角川書店、昭和四十九年)。

今西實氏「解説」(今西實氏編『義経及紙』、三弥井書店、昭和六十三  
年)。

② 注①の山岸氏の論文に同じ。

③ 佐藤陸氏「義経記」諸本の展開(梶原正昭氏編『軍記文学研究叢書  
曾我・義経記の世界』、汲古書院、平成九年)に詳しい。

④ 佐藤陸氏「義経記の一考察——判官物舞曲との交渉——」(佐々木八郎博  
士古稀記念事業会編集委員会編『軍記物とその周辺』、早稲田大学出版  
部、昭和四十四年)。

⑤ 注①の村上氏の論文に同じ。

⑥ この常盤の都落ちの伝承については、角川源義氏(『語り物文芸の発  
生』、東京堂出版、昭和五十年)・梶原正昭氏(『義経記』覚え書——  
宇陀と義経伝承——)、『古典遺産』第三十六号、昭和六十年七月(『軍  
記文学の位相(汲古書院、一九九八年)』)に「義経記」における伝承基  
盤——山科・宇陀を例として——として所収)の両氏などによって  
検討されている。

⑦ 赤木本は『赤木文庫本 義経物語』(角川源義氏・村上學氏編、角川  
書店、昭和四十九年)より、田中本は『日本古典文学全集 義経記』  
(梶原正昭氏校注・訳、小学館、一九七一年)より本文を引用。以下同  
じ。

⑧ 注⑤に同じ。

⑨ 『幸若舞曲研究』(笹野堅氏編、臨川書店、昭和四十九年)より本文を  
引用。

- ⑩ 「語り物（舞・説経・古浄瑠璃）の研究」、風間書房、昭和四十五年。
- ⑪ 『日本古典文学大系 保元物語 平治物語』（永積安明氏・島田勇雄氏校注、岩波書店、昭和三十六年）より本文を引用。
- ⑫ 『新日本古典文学大系 平家物語』（梶原正昭氏・山下宏明氏校注、岩波書店、一九九一年）より本文を引用。
- ⑬ 「〔注釈編〕『靡常盤』」での服部幸造氏の注釈による。（吾郷寅之進氏編『幸若舞曲研究 第一巻』、三弥井書店、昭和四十八年）
- ⑭ 服部幸造氏注釈「〔注釈編〕『靡常盤』」（吾郷寅之進氏編『幸若舞曲研究 第一巻』、三弥井書店、昭和四十八年）より本文を引用。
- ⑮ 『新日本古典文学大系 保元物語 平治物語 承久記』（栃木孝惟氏・日下力氏・益田宗氏・久保田淳枝校注、岩波書店、一九九二年）より本文を引用。
- ⑯ 日下力氏「平治物語」常業譚考、「国文学研究」八十、一九八三年（『平治物語の成立と展開』（汲古書院、一九九七年）前篇第三章第一節に所収）。
- 山下宏明氏「幸若舞曲の構造 ——『義経記』と比べて——」（岡見正雄氏・角川源義氏編『鑑賞日本古典文学 太平記・曾我物語・義経記』、角川書店、昭和五十一年）。
- 信多純一氏「山中常盤」について（辻惟雄氏編『絵巻山中常盤』、角川書店、昭和五十七年）。
- ⑰ 注④・⑤に同じ。
- ⑱ 竹本宏夫氏他「幸若輪講① 伏見常磐（一）・（二）」（『伝承文学研究』第十四・十五号、昭和四十八年四・十二月）より本文を引用。以下同じ。
- ⑲ 「か」については源氏物語においても論じられている。（広岡曜子氏「源氏物語の『か』攷 ——源氏物語テクストの編集句——」、『同志社国文学』第二十七号、一九八六年三月）
- ⑳ 竹本宏夫氏他「幸若輪講① 伏見常磐（一）」、「伝承文学研究」第十四号、昭和四十八年四月。
- ㉑ 常盤の理想化については、室木弥太郎氏などの指摘がある。（注⑩に同じ）。
- ㉒ 常盤の母の理想化についても、注⑫と同じ。
- ㉓ 静の伝承については徳江元正氏（『静御前の廻国』、「国学院雑誌」、昭和三十五年十一月）・角川源義氏（注⑥の角川氏の著書に同じ。）によって論じられている。また静と母磯禪師の關係について芸能説話の型としての岩松研吉郎氏（『巻六の静について ——『義経記』ノート・2』、「藝文研究」第五十七号、一九九〇年三月）の指摘や、静と祇王・建礼門院との重なりについての山下宏明氏（『義経記』の『平家物語』受容」、「国語と国文学」、一九九六年三月『いくさ物語の語りと批評』世界思想社、一九九七年）第十一章に所収）の指摘がある。
- ㉔ 久我氏と『義経記』の關係については、角川源義氏の指摘（注⑥の角川氏の著書に同じ）がある。
- ㉕ 十郎兼房については梶原正昭氏（注⑥の梶原氏の論文に同じ）・大城実氏（『異本義経記』の検討）、梶原正昭氏編『軍記文学研究叢書 曾我・義経記の世界』、汲古書院、平成九年）によって論じられている。
- ㉖ 榊原千鶴氏注釈「含状」（福田晃氏・真鍋昌弘氏編『幸若舞曲研究 第八巻』、三弥井書店、平成六年）より本文を引用。
- ㉗ 注④に同じ。
- ㉘ 市古貞次氏「幸若舞・曲舞年表」（『中世小説とその周辺』、東京大学出版会、一九八一年）による。
- ㉙ 日下力氏「平治物語の成立と展開」、汲古書院、一九九七年。
- ㉚ 『芳野本義経記』（古典研究会、昭和四十年）より、本文を引用。なお便宜上、句読点等を付した。

③ 志田元氏「芳野本『義経記』の一考察」、『伝承文学研究』第九号、昭和四十二年九月。

〔付記〕

本稿は関西軍記物語研究会第三十二会例会（一九九八年四月二十六日・神戸大学）での口頭発表をもとにしたものです。席上御教示いただきました方々に深謝申し上げます。